



TITLE:

京大広報 No. 711

AUTHOR(S):

京都大学企画・情報部広報課

CITATION:

京都大学企画・情報部広報課. 京大広報 No. 711. 京大広報 2015, 711: 4425-4440

ISSUE DATE:

2015-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202942>

RIGHT:



京大広報

No. 711

2015.5



山極総長が百周年時計台記念館の塔時計主治医の杉谷鉄夫氏に感謝状を贈呈
—関連記事 本文4430ページ—

目次

京都大学について想うこと 産官学連携担当理事 阿曾沼慎司……	4426
〈大学の動き〉	
ワシントン DC での USJI WEEK に参加 ……	4428
退職者功労表彰式を挙行政……	4428
名誉教授称号授与式を挙行政……	4429
体育会による壮行会を開催……	4430
山極総長が百周年時計台記念館の塔時計主治医 の杉谷鉄夫氏に感謝状を贈呈……	4430
本学と公益財団法人稲盛財団が「京都こころ会 議(Kokoro Initiative)」に関する寄附同意書を 締結……	4431
〈部局の動き〉	
医学部附属病院で初の国産移動型術中 CT 稼働 を開始……	4431
皇太子殿下が総合博物館の医学史展「医は意なり 一命をまもる知のあゆみ」を御高覧 ……	4432
〈寸言〉	
感動と挑戦	藤本 勝司……4433

〈随想〉	
京大はやっぱりパイオニア・ワークでなくっちゃ 名誉教授 末原 達郎……	4434
〈洛書〉	
マルコの自転車	山子 茂……4435
〈話題〉	
JST さくらサイエンスプランの学生が地球環境 学堂を訪問……	4436
エコへど京大・春の陣を開催……	4436
京都大学テックコネクト(新技術説明会)2015 を開催……	4437
第21回大学教育研究フォーラムを開催……	4438
人文科学研究所 第10回 TOKYO 漢籍 SEMINAR を開催……	4439
地球環境学堂・学舎長らの一団が、Varanasi 市 を訪問および Banaras Hindu 大学と部局間交 流協定を締結……	4439
宇治おうばくプラザで「第6回たそがれ花見コ ンサート」を開催 ……	4440

京都大学企画・情報部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

巻頭言

京都大学について思うこと

産官学連携担当理事 阿曾沼 慎司

昨年の10月から産官学連携担当理事に就任しました。

私は1969年に京都大学に入学し、1年留年して1974年に卒業し、公務員生活を38年6ヶ月過ごして、また京都に帰ってきました。その間、地方勤務、海外勤務をそれぞれ3年経験し、それ以外の32年余りは東京で過ごしました。

38年振りの京都は、時間が空間に刻まれた街として相変わらず魅力的でした。

私の学生時代

湊 長博 研究・企画・病院担当理事・副学長やフィールズ賞を受賞した森 重文 数理解析研究所教授・国際数学連合総裁らと同じ年に京都大学に入学した私の大学生活は、当時の京大生としてはごく普通の平凡なものでありましたが、今から考えると大変貴重で濃密な時間でした。社会人として生きていくための精神的基盤のほとんどは、あの時代に培われたものといっても過言ではありません。京都の学生生活は、個々人の思想、世界観の形成に大きな影響を与えるものだと思います。

寒い下宿で毎晩酒を飲んで議論するうちに、多くのことを学びました。

モーツァルト、セザンヌ、ボードレール、カフカ、ヘーゲル、フッサール、ハイデッガーなどに少しでも触れることができたのは先輩諸兄、同僚、友人のおかげです。

私の下宿には6人の学生がいましたが、私以外は全員医学部の学生でした。当時、医学生達は興奮して、毎晩、20世紀生物学の最大の発見といわれるDNAの二重らせんについて議論していました。ワトソン、クリックの発見がいかに素晴らしいかと聞かされたものです。私にはなぜワトソンとクリックが二重らせんを思いついたのかがずっと疑問だったのですが、20年以上たった1992年に、スペインのバ



ルセロナでサグラダ・ファミリアの尖塔をてっぺんに向けて登って行くうちに突然閃きました。日本では天守閣に登っても直線的なはしご階段しかありませんが、ヨーロッパの人々は幼い頃から

らせん階段に親しんでいるので、二重らせんを思いついたのだと勝手に推察しました。

当時、若き医学生が「機能や作用」の発見では飽き足らず、あくまでも「構造やメカニズム」自体を解明したいと言っていたのが今でも思い出されます。

京都大学とは

京都大学の意義を構成している特性に沿って考えてみましょう。

＜京都にある＞

京都は三方を山に囲まれ、狭い地域に多くの人々が住んでおり、互いに影響しあって共存しています。四季の移り変わりを体感でき、特に冬の凜とした寒さは深い思考を誘います。また、湿潤な気候で緑が美しく、日本人の繊細な美意識を呼び起こします。

千年の都は、政治と文化が幾重にも積み重なっているところですから、日常生活のなかで、様々な時代の歴史的文化的遺産に出会うことができます。神社、仏閣が多数残っており、街全体に思想の蓄積があります。また、戦乱の世をしたたかに生き抜いてきた市民には独特の精神が息づいています。

政治・経済の中心である東京から500キロ離れており、情報がめまぐるしく飛び交うこともなく、静かに、また、ゆっくりとものを考えることができる環境にあります。

＜大学である＞

大学は「学問の府」です。

予備校や専門学校ではありません。学問を追究する場です。高校までの教育機関と本質的に異なるのは、研究があって教育があるということです。研究と教育が切り離せない関係にあることが大学の極めて重要なところ です。

「真理の探究」、「本質の追求」のなかから「普遍的な原理」や「新しいパラダイム」を発見して、それから導かれる「汎用性の高い技術」を社会に展開していくのが大学の役割だと思います。

＜歴史と伝統ある総合大学である＞

京都大学には文理融合による新しい発想を生み出す歴史があります。創立以来「自由」、「創造」の学風があり、「対話」、「議論」の伝統があります。ヨーロッパでは神学部がある大学しかユニバーシティとは呼ばないと聞いたことがあります。ローマ法や中世哲学の研究者を擁しているという点で、京都大学は日本では大変貴重な大学です。

このような大学であるからこそ「正解をできるだけ早くみつける」ことよりは、「答えのない問いをじっくりと考える」ことを大切にしているのだと思います。

京都大学に期待するもの

過去100年の間に地球全体は急激な変貌を遂げました。「自由」、「民主主義」、「市場経済」といった価値観だけでは解決ができない問題が山積しています。

温暖化をはじめとする環境問題、食糧・水・エネルギー問題、様々な民族・宗教間の対立、社会的格差の拡大、実体経済と貨幣経済の乖離といった諸問題に取り組むためには、近過去の成功体験やビジネスモデルに頼るのではなく、まず、先人の歴史、伝統、文化に学び、長期的歴史観に立って、基本となる価値観・世界観を確立しなければなりません。

京都大学は今後の100年を見通した思想、哲学を

養う大切な学府でなければならないと思います。

現在、大学では、功利主義や有用性という価値観が主流を占めることも多いのですが、「独創的、先端的な研究」は、「功利主義的価値観に対抗する価値観」や「普遍的な原理、原則の追求によるパラダイムシフト」により生まれる可能性が高いともいえます。

京都大学にはそのような多様な価値観がぶつかり合う豊かな土壌があります。

いかなる厳しい環境にあっても、遠方を望む視点に立って、様々な価値観を柔軟に受けとめ、自分の思考の軸を失うことなく、リーダーシップを発揮できる強靱な人間を輩出する大学であって欲しいと思います。そのためには、この大学は「真理」を探求する「学問の府」としてあり続けなければなりません。

京都大学には将来のリーダーの「知性の涵養」、そして「人格の錬磨」の貴重な場であることを期待します。

30年後のために

京都大学は、世界に開かれた大学でなければなりません。

アジア、とりわけASEAN諸国は、中国と国境を接し、また南シナ海に面しているという地理的位置付けからしても、我が国にとって大変重要な国々です。また、イスラム社会とどう向き合うかという意味で、比較的穏健なイスラム国家であるインドネシア、マレーシアと交流を深めることは意義のあることだと思います。

ASEAN諸国からの留学生を京都大学が学部生中心に積極的に受け入れ、京都の学生生活を経験し、日本についての理解を深めていただく。その後、留学生はそれぞれの母国に帰って自国のために働き貢献することが期待されます。

そのためには、留学生が生活するための住居と奨学金の仕組みが必要です。

30年後、ASEAN諸国で日本に愛着を持ったリーダーが活躍できるようなプロジェクトを、今、京都大学として推進できればと思います。

大学の動き

ワシントン DC での USJI WEEK に参加

本学を含む日本の8大学連携で活動している日米研究インスティテュート (USJI: U.S.-Japan Research Institute) が主催するUSJI WEEKが2月23日(月)と24日(火)にワシントンDCで開催され、日米の政府関係者、シンクタンク、企業、大学関係者、報道関係者、学生等が多数参加した。

本学からは、USJI副理事長を務める森 純一 国際交流推進機構長と事務部職員が参加した。

USJI WEEKとは、USJIの研究プロジェクト等の成果を発表するとともに米国内でのUSJIの認知度



学生セミナーで講演する森機構長

を高めるため、ワシントンDCにて約1週間続けて各種プログラムを実施するイベントで、平成26年度

は昨年9月と今回2月の2回行われた。

森機構長がスピーカーを務めた24日の学生向けセミ



USJI Week セミナーの様子

ナー “Can the ASEAN Countries avoid the Middle Income trap, and How is that Relevant for the US and Japan?”では多数の参加者から積極的な質問が飛び交い熱を帯びた実りの多い催しとなった。

今回のイベントを含むUSJIの各種活動状況および成果報告は、日本語・英語の両方でワシントンDCから発信している。本学も、米国開催プログラムへの研究者・学生派遣等、今後も引き続き情報提供・支援を行っていく。

(企画・情報部(国際企画課))

退職者功労表彰式を挙行

退職者功労表彰式が3月31日(火)に本部棟5階大会議室において開催され、山極壽一 総長、清木孝悦 総務・労務・人事担当理事、高橋雅之 総務部長、被表彰者20名が出席した。

退職者功労表彰式は、退職時において勤続年数が30年以上の教職員ならびに有期雇用教職員に対し、その永年にわたる功労を讃えるため、平成24年度から創設されたもので、平成26年度末の被表彰者は37名であった。

表彰式では出席の被表彰者の氏名を紹介した後、総長より、代表者に対して表彰状が授与され、祝辞が述べられた。祝辞では、永年本学の発展のために多大な尽力をいただいたこと、今後も引き続き尽力いただく方を含め、教員、職員の協力のもとWINDOW構想を実現していくことに触れ、感謝の



代表者に表彰状を授与する山極総長

言葉が述べられた。

祝辞の後には、総長との記念撮影を行う等、各々交流を深め、和やかな雰囲気の中で式が終了した。

(総務部)

名誉教授称号授与式を挙行

4月6日(月)午前11時から、百周年時計台記念館において、理事、監事、副学長、副理事、理事補、部局長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行された。

山極壽一 総長より称号を授与された方は、次の58名である。



山極総長より称号を授与される元教授の方々

氏 名	推 薦 部 局
山根 寛	医学研究科
西垣安比古	人間・環境学研究科
井上 丹	生命科学研究科
小松 賢志	放射線生物研究センター
千葉 勉	医学研究科
加賀爪 優	農学研究科
佐藤 昭裕	文学研究科
菅原 和孝	人間・環境学研究科
中原 俊隆	医学研究科
長田 重一	医学研究科
中野 隆人	農学研究科
前平 泰志	教育学研究科
福山 秀直	医学研究科
森山 裕丈	原子炉実験所
三野 和雄	経済研究所
山本 行男	人間・環境学研究科
松岡 俊文	工学研究科
小林 繁男	アジア・アフリカ地域研究研究科
坂田 隆造	医学研究科
年光 昭夫	化学研究所
今井 晴雄	経済研究所
野本 慎一	医学研究科
森 真理子	国際交流推進機構
藤田 正勝	総合生存学館
小野 紀明	法学研究科
中坊 徹次	総合博物館
日置弘一郎	経営管理研究部
伊従 勉	人間・環境学研究科
西田 律夫	農学研究科

氏 名	推 薦 部 局
川崎 良孝	教育学研究科
小林 致広	文学研究科
上原 真人	文学研究科
岩田 博夫	再生医科学研究所
佐野 史道	エネルギー理工学研究所
佐伯 啓思	人間・環境学研究科
河野 憲二	医学研究科
田中 一義	工学研究科
木田 章義	文学研究科
水山 高久	農学研究科
松井 正文	人間・環境学研究科
青木 健次	学生総合支援センター
前川 孝	エネルギー科学研究科
大森 治紀	医学研究科
宮川 豊章	工学研究科
中辻 憲夫	物質・細胞統合システム拠点
山本 裕	情報学研究科
富永 茂樹	人文科学研究所
押川 文子	地域研究統合情報センター
高橋 達郎	情報学研究科
乾 敏郎	情報学研究科
金 文京	人文科学研究所
伏木 亨	農学研究科
櫻井 芳雄	文学研究科
米森 敬三	農学研究科
山名 元	原子炉実験所
加藤 幹郎	人間・環境学研究科
齋藤 邦明	医学研究科
加藤 直樹	工学研究科

(総務部)

体育会による壮行会を開催

4月13日(月)百周年時計台記念館前広場にて体育会壮行会が開催され、各クラブが勢揃いした。

この催しは毎年、体育会各所属団体の活躍と体育会全体の発展を期して行われているもので、体育会



総長の挨拶

所属の全クラブのメンバーが集結したほか、昼休みの時間とあって、多くの学生が集まった。

壮行会には、山極壽一 総長、小田滋晃 体育会会長、杉万俊夫 学生担当理事・副学長等を迎え盛大に執り行われた。山極総長の挨拶に始まり、小田体育会長の激励の言葉に続けて、中村総一郎

体育会幹事長補佐より体育会を代表しての挨拶があり、その後、阿知波宏明 ウインドサーフィン



応援団による演舞演奏の様子

部主将による力強い選手宣誓が行われた。最後は、応援団による力強い演舞が披露された。

参加したクラブの学生達は、七大戦をはじめ後の大会の勝利を誓い合った。あいにくの雨模様の中であつたが、力強く盛大な壮行会となった。

(教育推進・学生支援部)

山極総長が百周年時計台記念館の塔時計主治医の杉谷鉄夫氏に感謝状を贈呈

昭和45年から約45年間にわたって百周年時計台記念館の塔時計および鐘の点検・補修業務を行い、3月末に引退した杉谷鉄夫氏(杉谷ムセン社長)に、3月31日(火)、山極壽一 総長が感謝状を贈呈した。

迎賓室において挙行された贈呈式で山極総長は「本学のシンボルでもある百周年時計台記念館の塔時計の主治医として、永年にわたって点検・補修に携わっていただきました。おかげさまで、塔時計ならびに鐘は正確に時を刻みながら本学を見守ってくれています。そのご苦勞に対しまして、深甚なる感謝の意を表します」と述べた。



山極総長から杉谷氏へ感謝状を授与

本感謝状は約45年間に及ぶ塔時計および鐘の点検・補修業務のほか、塔時計および鐘の現存しなかった設計図を創起させ、駆動装置をはじめ関連装置やシステムをほぼ復元させたこと、渡英しビッグベンを訪問するなどして駆動電動機歯車用のオイルを見つけ出したことなどの功績に対して贈呈したものである。

▼杉谷氏の功績について、詳しくは以下にも掲載されている。

「時計台を支える人」

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/clocktower/about/tetsuo_s.html



最後のメンテナンスの様子

(施設部)

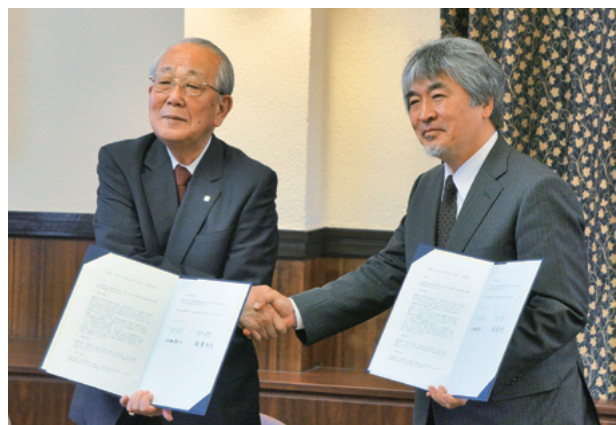
本学と公益財団法人稲盛財団が「京都こころ会議(Kokoro Initiative)」に関する寄附同意書を締結

本学では、このたび公益財団法人稲盛財団からの支援を受けて「京都こころ会議(Kokoro Initiative)」を実施することとなり、その支援に関する寄附調印式を4月14日(火)に百周年時計台記念館2階迎賓室において挙行了した。

本学と公益財団法人稲盛財団は、平成15年より5年間、「京都文化会議」を京都府と共に開催し、こころの重要性について様々な提言を行ってきた。また、京都文化会議の精神と討議を継承した、京都大学「こころの未来研究センター」の設立とその後の研究活動の支援も継続して行っている。

本寄附同意書では、これらの経緯を踏まえて、人のこころがいかに大切なものであるかを改めて問い直し、その理解と実践を促進するための提言を、京都より世界に向けて発信することを目的として、本学が「こころの未来研究センター」を中心として新たに取り組む「京都こころ会議(Kokoro Initiative)」を実施し、公益財団法人稲盛財団に、その活動を本年より6年間にわたり毎年1,500万円、総額9,000万円支援いただくこととしている。

調印式には、公益財団法人稲盛財団からは、稲盛和夫 理事長、稲盛豊実 専務理事、檜物省一 事務局長、姫田和仁 事務局次長が出席され、本学からは、山極壽一 総長、吉川左紀子 こころの未来研究センター長、河合俊雄 同教授が出席し、山極総長と稲



署名した同意書を手に握手を交わす
稲盛理事長(左)と山極総長(右)

盛理事長が寄附同意書に署名した。

「京都こころ会議(Kokoro Initiative)」の具体的な取り組みは、「こころの未来研究センター」を中心とした本学の全学的な運営委員会と本学の研究者、国内外の招聘研究者、芸術家、企業家などの参加による年4回程度の「こころ研究会」の開催、「こころとは何か」を問う「京都こころ会議」や「国際京都こころ会議」の開催、および「こころ研究会」等の成果を日本語、英語でそれぞれ出版することとしており、第1回「京都こころ会議」(こころとは何か? - その歴史性)(仮)を9月13日(日)に京都で開催する予定である。

(総務部)

部局の動き

医学部附属病院で初の国産移動型術中CT稼働を開始

医学部附属病院では、高度な外科医療を支援できる術中画像診断システムとして統合型高性能画像診断サーキットintegrated Smart Imaging Circuit (iSIC)を手術室に設置する事業を進めている。今回、その一環として、4月8日(水)より国内で初めて製造された高精度移動型術中CTを稼働する。

CT(コンピューター断層撮影法)は、短時間に身体を輪切りした断面像を撮影できるため、日常診療で重要な検査機器である。しかし、機器自体は非常に大きいためにCT検査室で撮像する必要がある。また、国内で手術室に設置されている術中CTも大がかりな設備であり、患者さんを検査室に運ぶ必要

がある。そこで、臨床の現場、特に手術室では、簡便にCT撮像できる機器の開発が待望されていた。海外では、早くからCT検査器の小型化、移動型の開発が進んでいるが、使い勝手がよく、高画質の撮像が可能な機器は未だなかった。

今回、同病院が導入した移動型CT手術支援システムでは、国内で初めて開発された移動型CT撮像機、最新のナビゲーションで構成される。移動型CTは、一人一人で移動が行え、高画質なCT撮像が可能である。得られた断面像を再構成し、高精度の3次元立体画像を即座に提示することができ、手術中の状況を即座にナビゲーションと連動させて手術支援を行うことも可能になる。手術中にCTでリアルタイムに術中診断を行うことは、手術精度の向上、合併症の回避に非常に有用である。

同病院では、今回導入する移動型CT手術支援システムと、既に稼働している次世代型ハイブリッド手術室と高磁場3テスラMRI手術室を連携させ



移動型CT撮像装置

ることで、治療に伴う患者さんの負担軽減と機能改善・温存を目指して、治療困難な疾患に苦しむ患者さんの治療に取り組んでいく。

(医学部附属病院)

皇太子殿下が総合博物館の医学史展「医は意なり一命をまもる知のあゆみ」を御高覧

皇太子殿下が4月11日(土)に総合博物館において、医学史展「医は意なり一命をまもる知のあゆみ」(主催:第29回日本医学会総会2015関西、共催:京都大学総合博物館)を御覧になられた。

第29回日本医学会総会2015関西の開会式に御臨席の後、同博物館に行啓されたものである。

この医学史展は、日本医学会総会が京都で開催されることにちなんで企画したもので、日本の医学について古くは平安時代から現代の先端医療までを「藏志」等の古医書や聴診器の変遷をはじめとする資料約80点とパネルを用いて紹介している。

皇太子殿下は、山極壽一 総長らの出迎えを受けられた後、奥沢康正先生(日本医史学会名誉会員(元常任理事))の案内で「関西を中心とする明治以前の医学史」コーナーを御覧になられ、麻酔薬を開発した華岡青洲や京都で活躍をした産科医・賀川玄悦に関する資料に関心を寄せられた。

明治時代以降から現代の先端医療については、湊



湊理事・副学長の説明をお聞きになる皇太子殿下

長博 研究担当理事・副学長が案内した。皇太子殿下は、本学初代病理学教授である藤浪 鑑博士の功績、日本人技術者による胃カメラの開発についての話に興味を示され、昭和20年代～昭和30年代に主流だった陰圧式人工呼吸器「鉄の肺」などを御覧になられた。

(総合博物館)

寸言

感動と挑戦

藤本 勝司



私は、昭和43年に日本板硝子(株)に入社しました。学生時代は工学部の工業化学科に籍をおき、化学全般を学びましたが、当時は化学といえは有機化学が幅を利かせており、多くの学生は有機化学に興味を持っていました。私はベンゼンの匂いが苦手です。やむなく無機化学のガラスを専攻し、その関係でガラス会社に入社することになりました。

学生時代の研究対象は光学ガラスの吸光特性に関するもので、将来、通信に光を応用する時代が来るものと期待し、会社に入っても、当然、研究所に所属し、光関係の研究開発に従事するものと決め込んでいたのです。

ところが実習期間がおわり、配属先が決まる時、君は研究所ではなく、工場勤務という内示を受けました。大きなショックを受けたのを覚えています。心のどこかに生産活動より研究活動の方が仕事としてレベルが高いという奢りがあり、転勤異動の時期毎に研究所勤務を希望したが叶えられず、数年を経てようやく工場の生産技術者として生きていこうと決心しました。ガラスの調合、溶解、成型、徐冷、切断、検査、包装などの要素技術を習得し、設備の特徴を理解するのに時間がかかりましたが、何とか一人前の生産技術屋として認められました。その間、現場で働く立場の違う多くの従業員の皆さんと心をつなげるにはどうすべきかという課題にも悩みましたが、組合活動にも力を入れようと思い、組合幹部に立候補し、以来6年間も頭を突っ込みました。地域の市議員選挙や会社の省力、人員削減提案に対処したのが思い出として残っています。生まれ育った環境も違う、又価値観も違う多くの方々と意見を闘わせ、一つになろうとお互いに努力した若いこの時の経験が、後に経営者として大いに役立ちま

した。

40歳代後半は液晶のビジネスに、50歳代前半には光通信のビジネスに従事させてもらい、ガラス造りの現場から、製販技一体となった新しいビジネスを経験させてもらえたのは幸運であったと思います。

平成16年に社長に就任しましたが、その時、社内に次の二つのキーワードを訴えました。

感動と挑戦です。

企業という大きな組織が、もし一つに纏まれば大きなむずかしい課題もいつかは達成できる。逆にバラバラになれば、何ひとつ達成できない。管理職の皆さんは、自ら感動し、又まわりの方に感動を与えようじゃないか。世代の違い、男女の違い、国、宗教の壁を乗り越えられるのは感動だ。芸術もスポーツも又、恋愛も感動のレベルで一つになるから盛り上がるのだ。指示、説得、納得、共感のレベルではダメ、人は感動したら、次は必ず黙っていても行動に移ると。

もう一つは挑戦です。失敗を恐れず挑戦しなさい。従って、人事評価は次の5段階で行うと。

- 1位 真剣に考えて成功した人。
- 2位 真剣に考えたが失敗した人。
- 3位 あまり考えなかったが成功した人。
- 4位 あまり考えずにやはり失敗した人。
- 5位 成功も失敗もしない人。

とかく頭の良い人は、失敗するのが先に見えるのか行動を起こさない。しかし、他人を評価するのは超一流でいつも評論家。こういう類の人が多くいると組織は衰退する。

失敗経験のある人は次には成功する確率が高い。

こういうふうに変革文化を変えようと必死に取り組んできましたが、まだ道半ば。

新しい経営陣に期待すると同時に、これからは、元気で活発に、無邪気の心を失わず、暮らしていきたいと思っています。

(ふじもと かつじ 日本板硝子株式会社名誉顧問、昭和41年工学部卒業)

随想

京大はやっぱりパイオニア・ワークでなくっちゃ

名誉教授 末原 達郎

人生には、いくつかの転機があるものだ。私にとって最初の転機は、京大入学の直後に訪れた。

農学部に入學が決まった時、いったい人生で何をしようかと考えた。私は、京都生まれの京都有ちで、できるだけ遠くの世界に行きたいと考えていた。

目標としたのが、アフリカだった。その頃、今西錦司先生のグループが、アフリカでゴリラやチンパンジーの研究から人類学へと研究を展開されていた。そこで、アフリカの農業・農村・食料問題の研究を一生の研究目標に決めて、1972年に農学部に入學した。一年生の春に、近衛ロンドという人類学の自主研究会に入り、さらに、探検部にも入った。スワヒリ語の自主勉強会も始めた。大学一年の時は、ほんとうに忙しかった。授業は比較的休みが多く、また試験よりもレポートの方が多かった。私自身としては、自由に勉強ができる京大の方法は本当に楽しく、満喫することができた。受験勉強ではなく自分の好きな勉強を学部を超えてすることができ、時間は有り余るほどあった。ほんとうによい時代だったと思っている。

二度目の転機が訪れたのは、博士課程に入った時である。学部時代は、あれほどアフリカ調査の準備をしていたのに、実際にアフリカには行けなかった。そのかわり、日本の農村で調査をして、モノグラフの書き方を学んでいた。修士の時も、日本の沖縄の離島の農村で研究を行い、農村調査を積み重ねていった。博士課程に入って、ようやく、アフリカ調査に参加するチャンスが訪れた。大学入学以来6年半たった。

参加できたのは、教養部の米山俊直先生と理学部の伊谷純一郎先生の主催する「赤道アフリカ地域の人類学的総合調査」隊で、ザイール共和国(現コンゴ民主共和国)に赴き、焼畑農耕民の農業・農村調査を行った。たった一人で山の中の村に何か月も住み



込むという、いかにも京大らしいやり方であった。熱帯農業を実際に体験しながら、農耕技術だけでなく、土地制度、労働組織の研究を積み重ねていった。さまざまな病気には罹ったが、本当に楽しく、京大に入って、ほんとうによかった、自分のやりたいことができたと思った。

三度目の転機は、京大の農学研究科の古巣の研究室に戻った時である。出身の農学原論の研究室では、院生と教員とが対等に議論を重ね、自分の頭で考える方法を貫いた。同時に、先進国や日本に集中していた農学研究の体系を、発展途上国も含めた地球規模のものにしたいという希望もあった。

さらに、第四の転機が訪れた。今度は龍谷大学が、まったく新しく農学系の学部を作りたいので、手伝ってくれないかという話であった。別に京大に不満があったわけではないが、今の時代に、新しく「農学部」を作るという点を、意気に感じた。私は、パイオニア・ワークには、まず手を挙げるという習性が身についている。新しい農学部の創設は困難も多いが、たいへん魅力的な仕事に思えた。今ようやく、4学科400人の新設学部の開設が文科省に認められ、無事入試も終え、希望に満ちた新入生が、教室に顔を出し始めたところである。

京大に入學して以来、何の因果か、何度も何度も転機を迎える人生になった。私は、そのこと自体が実に京大的だったと考えており、後悔していない。国立大学に進むと、安全かつ確実に人生を歩みたいという人が多かろうと思う。でも、京大は、そうではない大学であり、そうあって欲しいと思う。果敢に新しいことに挑み、さまざまな困難に出あいながら、それでも前に進んでいって欲しいと思う。

私が京大で教わったこと、それは、自分自身が自分の頭で考えぬいたオリジナルなことかどうか、あるいは行動して得られた新事実に基づいているかどうか、が厳しく問われるということである。結局、「その仕事はパイオニア・ワークであるかどうか」、それがいつも問題とされた。

やっぱり京都大学の肝は、マネをしない、オリジナルな研究で学問の前線を切り開くことにある。そのためにはパイオニア・ワークを続けることのできる、自由な大学であって欲しいと思う。

(すえはら たつろう 平成26年退職、元農学研究科教授、専門は農学原論、比較農業論、食料人類学)

洛書

マルコの自転車

山子 茂



研究を進めていると、腑に落ちない、納得いかない結果に時々ぶつかる。本当にそうなのか、いろいろと考えを廻らしたり、実験をしているうちに(最近では、学生さんにさせていただいている、というのが正しいが)、ふと納得する時がある。うまく考えが収束したり、確かな実験的証拠が得られた時であり、それを機に新しいアイデアが次々に湧き出てくる重要な転換点である。翻って、日常生活の中で、そんな機会はどれくらいあるのだろうか?先日、昔取った写真の整理をしていたところ、15年ほど前、イタリア・ボローニャに家族で2か月ほど研究滞在した時、当時小1であった息子が夏休みの宿題として作った滞在記が出てきた。それを読み返してみても、思わずニヤリと思いついてしまった。そこに書かれていた息子の納得のいかなかった話と、今でも思い出に残る筆者が納得した話を紹介させていただく。

息子の不思議は、バス賃の支払いにあった。チケットを乗車時に打刻して持っているだけで、通常はそれを誰かが確認するわけでもない。すなわち、無賃乗車をすればできるのに、なぜこんなやり方をしているのか、という点である。もちろん、そのような不心得者もいるし、実際、検札で痛い目に合っているところも目撃している。しかし、明らかに日本と発想が違う。別の例では、ユーロスターに乗るときも、「ピピピピピーー、柵から離れてくださーい」なんてことはなく、いつの間にか列車が来て、席にたどり着いてふと気づくと発車していたりする。息子の手記は「パパに聞いたら、ここは大人の国なんだよ、と言われたが、僕にはよくわからなかった」と、納得いかぬままに終わっていた。しかし、筆者は相変わらず日本も早くもっと大人の国になってほしいと思っている。

筆者自身の話に移る。ボローニャがフェラーリで有名なイモラの近くであることは知っていた。しかし、当時はイタリア人は陽気なだけの適当な人種と思っており(失礼)、スーパーカーや靴・バッグ・服などのブランド品を造り出している人々とのギャップが埋まらぬまま訪問することになった。アパートは、市の中心部のマッジョーレ広場の近くの物件をお世話いただいた。18世紀(確か)に建てられたとのことで、第一印象は、「え、ここに住むの?」であった。しかし、室内はきれいに改築されていると共に、中庭に広がる景色もいかにもイタリアらしく、エレベーターが無いので荷物の上げ下げは大変だったが、すぐに住めば都状態になった。

研究を行った国立研究所はそこからバスを使って30分ほどであった。しかし、研究所がバス停から遠いことや、バスの便も少なく、通勤には難渋した。また、研究所に関しては、とにかく機器が古い、というのが第一印象であった。真新しい機器がほとんどなく、日本ではそろそろお払い箱級のものが現役で頑張っていた。しかし、意外と順調に動いているのが不思議であった。そんな時、実験を手伝ってくれていたテクニシヤンのマルコが、「シゲル、自転車を貸してやろうか」と言ってきた。渡りに船でお願いをしたところ、数日して「自転車を持ってきたので、ちょっと来い」と言う。喜んでついていったが、そこにあったのはお払い箱以上に年季の入った自転車であった。「俺の親父が使ってたのを整備したんだ」と言う。途方に暮れたものの、当人はその古さを全く気にしていないようだし、むげに断るわけにもいかず、しょうがなく借り受けた。その日の帰りである。憂鬱な気持ちで自転車に乗ると、ムムム,,,予想外に、いや、予想をはるかに超えて滑らかに進むではないか。その時、「これがイタリアか」とすべてが解けたような気がした。そう、やつらのこだわりは半端ないのである。それ以降は、塩野七生さんのイタリアに関する作品の影響もあり、イタリアに傾倒する一方である。

(やまご しげる 化学研究所教授 専門は合成化学)

話題

JST さくらサイエンスプランの学生が地球環境学堂を訪問

2月18日(水)から2月27日(金)にかけて、ベトナム国の3大学(ハノイ理工科大学, フェ農林大学, ダナン工科大学)から10名の大学生と3名の講師が本学と国内の環境関連施設を訪問した。

18日に歓迎会を開催し、昨年、一昨年に国際交流科目でベトナムを訪問した本学の大学生や関連教員と交流を持った。19日には、本学のベトナム人留学生による本学の説明と留学のススメに関する発表があり、その後、環境調和型産業論分野の微量化学物質の実験室を見学した。また、藤井滋穂 地球環境学堂・学舎長を訪問し、地球環境学堂の活動内容について説明を受けた。さらに、稲葉カヨ 国際担当



森林再生のための育苗施設の見学の様子



国際交流セミナーハウスでの集合写真

理事・副学長を訪問し、本学における国際交流について説明を受けた。20日には、広島市の平和祈念館などを訪問し、戦争と平和についての学習を深めた。23日には、滋賀県針江にある“かばた”を訪問し、湧水と人々との持続可能な調和生活について、現地の方の案内を受けた。24日には、地元企業による有機農業と森林の再生活動について説明を受け、25日には琵琶湖博物館にて、水環境と人々とのかかわりの歴史について学習を深めた。今回は、期間を通じて、国際交流科目でベトナムを訪問した本学学生、ベトナムにてインターンシップを行った大学院生の協力を得た。お互いの国にて環境施設を訪問し、互いに理解しあうことで、国際交流を深めることができた。

(地球環境学堂・学舎)

エコ〜ると京大・春の陣を開催

持続可能な社会の実現に向けた「働き方」, 「生き方」を支援するための企画として, 「エコ〜ると京大・春の陣」を, 3月9日(月)と10日(火)に総合研究8号館(3F・NSホールおよび講義室)において開催した。

持続可能な社会の実現に向けては, 環境問題や国際課題, 地域・一次産業の活性化, 社会貢献を前提とした事業展開などが求められる。そこで, それら

をキーワードとした企業や省庁, 地方自治体, NPO団体等と, そのキーワードに関心を寄せる本学の就職活動生が会う場を設定し, 「就職は, お見合い!」をコンセプトに, 通常の合同就職説明会とは異なる趣向の企画を展開した。

その一つが, 学生売り込みプレゼンである。「学生が企業を回って頑張るだけでなく, 自分を企業等に積極的に売り込むような機会があっても良いので

は？」との実行委員会メンバーの発案から、希望学生の募集を行い、実現した。当日は、就職活動生(学部生および大学院生)が、自転車で登場したり、得意の書道で綴ったり、自分ソングを披露したりなど、自分の経験や想いを、個性あふれる姿で披露した。会場に詰めかけた企業等の採用担当者や関係者は熱心に見入っていた。発表の様子は、世界に発信できるよう、WEBにアップしているので、是非ご覧頂きたい。

<https://www.youtube.com/channel/UCZHs05464HG98Nt5SnGnJ3Q>

また、学生がじっくりお見合い相手を探す企業・団体ブースも企画した。持続可能な社会の構築や国内外での社会貢献に力を入れる企業・団体等が約20



学生売り込みプレゼンの様子



企業・団体ブースで熱心に話す学生

社集まり、関心を寄せる学生と、1時間以上話しこむブースもあった。

イベント当日にとどまらず、今後も参加学生と企業との関係が成就し、持続可能な社会の実現の一助となるよう、支援を継続する予定である。

6月には、環境月間にあわせた祭典「エコ〜るど京大・初夏の陣」を実施する予定であるが、ここでも様々な出会いを演出したい。

詳しくは、こちらへ(<http://www.eco.kyoto-u.ac.jp/>)

※「エコ〜るど京大」とは、エコ×世界(ワールド)からの造語であり、「Think globally, Act locally, Feel in the Campus !」のメッセージをこめると同時に、京大の中でエコを学ぶ学校(Écoleとはフランス語で学校)を期間限定で開校する意味もこめたものである。

(環境安全保健機構(環境科学センター))

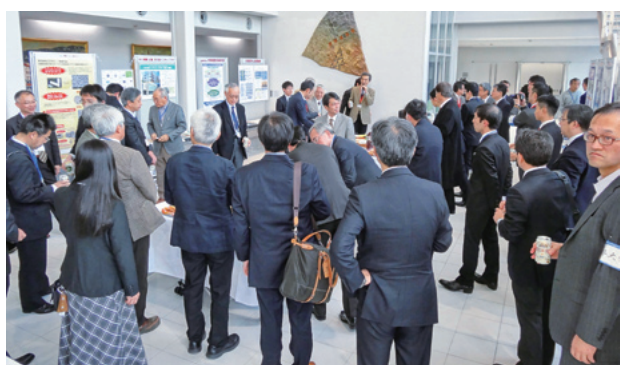
京都大学テックコネクト(新技術説明会)2015を開催

工学研究科附属学術研究支援センターでは、3月13日(金)に桂キャンパスイノベーションプラザにおいて、京都大学テックコネクト(新技術説明会)2015を開催した。今回は第3回目の開催となり、企業、金融機関、マスコミ等、80名に近い参加があり、満席の開催となった。

第1部の技術説明会では、「環境・エコ技術」をテー

マに、「排水処理」、「浄水処理」の各分野4名の若手研究者が、それぞれの研究成果を発表した。

第2部の交流会では、企業等参加者と講演発表者および吉崎武尚 副研究科長等との交流の場を設け、いろいろな技術質問、意見交換などで、熱心な話し合いが続いた。多くの産学連携コーディネーターも参加され、また、ベンチャー企業を中心とした企業



交流会の様子

のポスター発表の場を併設し、参加された企業、産学連携機関の紹介なども行われ、多彩な産学交流会

となった。

参加者からは、「今後講演者とコンタクトを取りたい」、「事業に役に立つ」といった声が聞かれた。

学術研究支援センターでは、今後も桂キャンパスイノベーションプラザにおいて、様々なテーマで本会を開催し、産業界と大学のマッチングの場、連携の足がかりとしていきたいと考えている。

※今後取り上げてほしいテーマ等があれば、学術研究支援センターまでご一報いただきたい。

(大学院工学研究科)

第21回大学教育研究フォーラムを開催

3月13日(金)と14日(土)に、吉田南構内および百年時計台記念館において、第21回大学教育研究フォーラムが開催された。

初日に開催された「大学教育の国際化×正課正課外における主体的な学び」と題されたシンポジウムでは、山極壽一 総長の挨拶に続き、佐藤邦明 文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画専門官より基調講演、芦沢真五 東洋大学国際地域学部教授、落合一泰 一橋大学大学院社会学研究科教授、飯吉 透 高等教育研究開発推進センター長の3氏から報告があり、最後に講演者全員によるディスカッションを行った。その後、会場の参加者を含めた活発な意見交換も行われ、10年以上にわたるセンターの大学教育に関わる取り組みの展開と今後の課



会場の参加者を含めての意見交換

題が紹介された。

個人研究発表では、ポスター発表34件、口頭発表106件の大学教育改善の実践研究に関する発表計140件があり、小講演では計8名による講演が行われた。フォーラム最後には参加者企画セッション11件が行われ、大学教育の最新の知見と実践に関して、各会場で活発な討論が交わされた。

この大学教育研究フォーラムには、2日間で学内外の大学関係者計662名の参加者があり、本学および全国の大学の教育改善のためのリソースが集積したといえる。また、初日のシンポジウム終了後の情報交換会でも、多くの参加者が一層の交流を深め、盛会のうちに終了した。

(高等教育研究開発推進センター)



ポスター発表の様子

人文科学研究所 第10回 TOKYO 漢籍 SEMINAR を開催

人文科学研究所では、3月16日(月)、東京の一橋講堂中会議場(学術総合センター内)において第10回「TOKYO漢籍SEMINAR」を開催した。

本セミナーの目的は、人文科学研究所が80年余にわたって蓄積してきた中国学研究の成果をわかりやすく紹介し、多くの人々に漢籍、ひいては漢字文化全般に関心を深めてもらおうとするものである。

本セミナーは富谷 至 東アジア人文情報学研究センター長の開会挨拶に始まり、「清玩—文人のまなざし」をテーマに、岡村秀典 教授「古鏡清玩—宋明代の文人と青柳種信」、高井たかね 助教「李漁の「モノ」がたり—「閒情偶寄」居室・器玩部より」、稲本泰生 准教授「利他と慈悲のかたち—松本文三郎の仏教美術観」の3講師による講演を行った。参加者からは、「中国文人の古鏡に対する考え方に興味を惹かれました。李漁の話に興味をそそられました。



セミナーの様子

仏教美術についてもっと時間をかけて説明してほしい。次回も楽しみにしています」などの感想があり、参加者141名のうちのほとんどが、10時30分から16時まで聴講した。

(人文科学研究所)

地球環境学堂・学舎長らの一団が、Varanasi市を訪問およびBanaras Hindu大学と部局間交流協定を締結

京都大学とBanaras Hindu大学(以下、BHU)は京都市とVaranasi市との間のパートナーシティ提携意向の下、調査研究を進めてきた。藤井滋穂 地球環境学堂・学舎長、ショウラジブ 地球環境学堂教授、塩飽孝一 地球環境学堂特定研究員、Ranit Chatterjee 地球環境学舎研究生の一団は、3月26日(木)から28日(土)までの間、インドのVaranasi市を訪問し、関係者との面談の後、BHUの環境および持続可能な開発研究所との部局間交流協定締結を行った。

26日に、BHUのGirish Chandra Tripathi学長との面談を行い、部局間交流の発展に向けてBHUが本交流に尽力することが確認された。また、Varanasi市役所の協力を得て実施した、Varanasi市の気象災害に対するレジリエンス調査の報告書を贈呈した。



部局間交流協定締結

27日には、部局間交流協定締結を前にVaranasi市役所を訪問し、Ram Gopal Mohley市長との面談を行い、一団から調査への協力に対し、謝意を示した。また、今後のさらなる協力が確認された。

Varanasi市役所訪問後、京都市・Varanasi市パー

トナーシップに関する会合を行った。地球環境学堂とBHUの環境および持続可能な開発研究所との部局間交流協定を締結した。その後、ショウ教授がVaranasi市の調査結果の概要を示した。この会合には、環境および持続可能な開発研究所の所長であるAkhilesh Raghubanshi教授を始め、Varanasi市長、

インド国外務省および都市開発省、インド側の京都市・Varanasi市パートナーシップ運営委員会、在インド日本大使館が出席しており、部局間交流の発展に大きな期待が寄せられた。

(地球環境学堂・学舎)

宇治おうばくプラザで「第6回たそがれ花見コンサート」を開催

宇治地区では、4月3日(金)に、宇治おうばくプラザきはだホールにおいて京都市交響楽団のメンバー「悲“愴”感トリオ」、北宇治中学校吹奏楽部による「第6回たそがれ花見コンサート」を開催した。

このコンサートは、おうばくプラザの広報と地域へのサービスの一環として毎年春に開催しているもので、連携協定を締結している宇治市より山本 正市長も来場され、ご挨拶いただいた。

「悲“愴”感トリオ」の演奏は、クラリネット、ファゴット、打楽器、ピアノの演奏に随所に楽器解説やトークを交えた親しみやすい内容で、来場者は、熱心に耳を傾けていた。

地域交流の一環として出演いただいた北宇治中学校吹奏楽部の演奏もダンスを交えた躍動感あふれるもので、大変好評であった。



「悲“愴”感トリオ」の演奏

当日は、あいにくの雨模様であったが、約250名の来場があり、地域の春の恒例行事として、今後も継続を期待する声が多くあった。



北宇治中学校吹奏楽部の演奏

(宇治地区事務部)